京都大学・今村知彦 特定助教が主導する「子供と死別した遺族と支援をつなぐ研究プロジェクト」、2027年1月の関西圏でのポータルサイト先行公開に向けて準備を推進

ポータルサイト「ともに、ここから」のロゴが決定。
支援団体とともに、遺族に支援を届ける仕組みづくりを進める



京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 予防医療学分野の今村知彦 特定助教が主導する研究プロジェクト「子供と死別した遺族と支援をつなぐ社会基盤構築：遺族・支援者共創によるプッシュ型グリーフケアシステムの開発」は、2027年1月の関西圏でのポータルサイト先行公開に向け、準備を進めています。

このたび、共創パートナーのスパイスファクトリー株式会社がデザインを担当したポータルサイト「ともに、ここから」のロゴが決定し、**11月23日の「グリーフを考える日」**を前に、本日ロゴを公開しました。

あわせて、関西圏を中心に約100団体へ掲載を依頼し、現在までに約40団体から承諾を得たこと、東北グリーフサポート代表の佐藤悠子氏が研究チームに加わったことをお知らせします。

本発表では、ポータルサイトや支援情報を案内するカードの制作状況とともに、取り組みの趣旨に賛同する団体からの声を紹介します。遺族や支援者の経験と視点を大切にしながら、必要なときに支援の選択肢に出会える社会基盤づくりを進めていきます。

グリーフを考える日

11月23日「グリーフを考える日」は、関西学院大学「悲嘆と死別の研究センター」が事務局を務める制定委員会によって2023年に制定された記念日です。

大切な人との死別による悲しみ（グリーフ）への理解を深め、遺された人それぞれの想いが尊重される社会を目指しています。勤労感謝の日に重ねて、グリーフワーク（喪の仕事）の途上にある人たちに心を寄せ、その歩みをねぎらう日として制定されました。

参考：関西学院大学「悲嘆と死別の研究センター」

■ 背景

子供を亡くした遺族を支える団体や活動は各地にありますが、情報が分散しているため、必要な支援にたどり着くことは容易ではありません。支援に出会えるかどうかは、今も「偶然」に委ねられています。

本プロジェクトは、グリーフケア団体や遺族に役立つ情報を集約するポータルサイトを開発しています。あわせて、病院や自治体など、死別後に遺族が必ず接点を持つ場所で、支援の選択肢が自然に届く仕組みの構築を目指しています。

■ ポータルサイト「ともに、ここから」のロゴ

子供と死別した遺族と支援をつなぐポータルサイト「ともに、ここから」（通称：トモココ）のロゴが決定しました。ロゴは共創パートナーのスパイスファクトリーがデザインを担当し、研究チームでの検討を経て決定したものです。今後、ポータルサイトやグリーフカードなどの制作物に使用していきます。

ともに、ここから

ロゴに込めた想い

重なり合う二つの円は、寄り添い合う人と人の姿を表しています。ただそばにいるだけでなく、想いを言葉にして話し合える関係性を、その重なりに込めました。

シンボル全体は植物のかたちで表しています。植物は誰かに急かされることなく、自分のペースで静かに育っていきます。無理に前を向くことを求めるのではなく、誰かを大切に思う気持ちがあるからこそ、ご自身のことも自分のペースで大切にしていただきたい。そんな願いを、静かに育つ植物の姿に重ねています。



■ 社会実装の進捗

1. ポータルサイト開発

共創パートナーのスパイスファクトリーが設計・開発を担い、支援団体や遺族に役立つ情報を届けるポータルサイトの開発を進めています。サイト内の言葉や情報の示し方についても、研究チームとともに確認を重ねています。

2. グリーフカード制作

病院・自治体・葬儀場など、遺族と接点を持つ場での案内を想定して、ポータルサイトを紹介するグリーフカードを、研究チームとスパイスファクトリーで制作しています。現場の担当者が連絡先などを記入して手渡す使い方を想定し、遺族への配慮、情報の過不足、表現やデザインについて確認を重ねています。

3. 支援団体との連携

2026年10月時点で、関西圏を中心に、子供を亡くした遺族が利用できる支援を提供している約100団体に掲載を依頼し、約40団体から承諾を得ています。遺族会、自治体、病院、葬儀社、NPO法人など、団体の形はさまざまです。支援の形も、分かち合いの会、心理カウンセリング、電話・チャット相談など多岐にわたります。各団体の活動と経験を尊重しながら、掲載内容の確認と、連携のあり方についての対話を重ねています。

4. 全国展開への体制強化

2027年10月の全国展開を見据え、東北グリーフサポート代表の佐藤悠子氏が、新たに研究チームに参画しました。同団体は、地域の支援活動を可視化する「グリーフサポートマップ」を［東北・阪神・広島地域］で作成してきました。本プロジェクトでは佐藤氏とともに、全国の遺族支援団体のリストアップと掲載の意向確認を進めています。

また、同団体が研究事務局を務める「グリーフサポート活動全国調査」に今村氏が研究協力者として参画し、全国の支援活動の可視化に向けて知見を共有しています。本調査は東北大学大学院文学研究科の谷山洋三教授を研究代表者とし、公益財団法人日本対がん協会の助成を受け、東北大学大学院文学研究科 調査・実験倫理委員会の承認（文倫20260701）を得て行われています。全国でグリーフサポートに取り組む皆さまに、ご協力をお願いしています。回答期限は2027年1月8日です。

調査の詳細・回答方法：https://sitesmadewith.wixsite.com/griefsupportmap

■ 研究代表者コメント



京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 予防医療学分野
特定助教 今村知彦

子供を亡くした方が、必要なときに支援の存在を知り、自分に合うつながりを選べるようにしたい。そのための社会基盤をつくることが、この研究プロジェクトの目標です。

「ともに、ここから」の開発を進めるにあたり、大切にしたいのは、これまで遺族を支えてこられた団体の皆さまの経験と、当事者の声です。支援を受けたいと思う時期や、求める関わり方は一人ひとり異なります。情報を届ける仕組みも、その方の気持ちや選択を尊重するものでありたいと考えています。

今回ロゴが決まり、グリーフケア団体の情報を掲載するポータルサイトやこのポータルサイトを案内するグリーフカードも、少しずつ形になってきました。ここから、実際にどのように届ければ役立つのかを、遺族や支援者の皆さまとともに確かめていきます。必要な支援との出会いを偶然に委ねず、社会の仕組みとして確実に遺族の元に届けられるよう、研究と実装を進めていきたいと考えています。

■ 研究チームメンバーコメント



NPO法人 SIDS家族の会 理事長 田上克男氏

「結局、運よね！」私たちがよく聞く遺族のこの言葉は、大きな意味を持っています。悲しみの海を漂う遺族が、救いの船や陸地に出会うかどうかは「運」だというのです。

そう遠くない昔、家での生老病死はあたりまえで、また周産期は今より危険なものでしたが、「運」ではない必然がいくらかありました。互助の習慣もその一つです。近所の長屋で不幸なお産があると、子どもを亡くした先輩の女性たちが家を訪ねて話し相手になり、吸われぬ乳の手当などを教えました。また、弟の悲しいお産の手伝いをした同級生の少女は、逆さ水のことやお母さんが毎日泣いて寝込んだことを話し、悪ガキたちも神妙に聞いていました。子を亡くした母もきょうだいを亡くした子も、さりげなく存在したのです。

時代の良し悪しは単純に評価できませんが、現在の遺族の未来は「運」に支配されています。有効なポータルサイトの構築は、遺族だけでなく未来の社会を守る砦になります。



東北グリーフサポート 代表 佐藤悠子氏

東北グリーフサポート（任意団体）では、地域の支援活動を可視化する「グリーフサポートマップ」の作成・普及に取り組んでいます。その活動を通して、支援を必要とする方が情報にたどり着けないことや、支援に関わる機関同士でも地域の活動情報が十分に共有されていないことを課題として感じてきました。全国のグリーフサポート活動を可視化し、必要な人と支援をつなぐ仕組みづくりを目指す本プロジェクトに参画しています。誰もが必要な時に安心して支援情報へアクセスでき、多様なグリーフのあり方に配慮した情報発信が広がることを期待しています。

■ 賛同団体コメント



子どもを亡くした家族の会「小さないのち」代表 坂下裕子氏

私が子どもを亡くしたとき、早期に望んだことは同じ立場の人の存在を知ることでしたが、最初の１人と出会うのに何か月もかかる時代でした。当時、2000年以前と現在の遺族を取り巻く環境の違いはインターネットの普及ですが、検索手段は手に入れても、探しあてる作業は現在も自力です。このポータルサイトが完成すれば、理想の活動や組織を見つけることが容易になるだけでなく、選べるようにもなります。私が運営する会は会員制で、対象は

全国ですが、集える場所は東京と大阪と名古屋に限られています。3都市以外の会員さんには何とか近隣でもケアを！と願い、各地の遺族支援組織との連携を期待してこの事業に賛同しています。

■ 共創パートナーコメント



スパイスファクトリー株式会社 プロジェクト責任者 太田佑祈氏

6月の発表から5か月、構想は少しずつ手に取れる形になってきました。ロゴが決まり、病院などで手渡すグリーフカードの制作も進み、関西を中心に約40の団体が掲載に応じてくださいました。形にする中で強く感じたのは、情報を「載せる」ことと、ご遺族に「届く」ことの間にある距離です。どんな言葉なら受け取っていただけるか、どの場面なら負担にならないか。研究チームや支援者の皆さまと、その問いを一つずつ確かめてきました。2027年1月の先行公開からは、実際に届いているかを確かめながら、仕組みを育てていきます。

今後の展開

2027年1月に関西圏でポータルサイトの先行公開を行い、遺族のアクセス状況や支援への到達度を検証したうえで、同年10月の全国展開を目指します。先行公開に向けて、ポータルサイトに掲載する支援情報の整備と、病院・自治体など関係機関との調整を進めます。

■ プロジェクト概要

項目	内容
研究課題名	子供と死別した遺族と支援をつなぐ社会基盤構築：遺族・支援者共創によるプッシュ型グリーフケアシステムの開発
研究代表者	今村知彦（京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 予防医療学分野 特定助教）
新たに参画したメンバー	佐藤悠子（東北グリーフサポート 代表）［遺族支援団体のリストアップ・情報収集］
共創パートナー	スパイスファクトリー株式会社（ポータルサイトの設計・開発、関係機関との連携構築、社会実装に向けたPR支援）

これまでの発表

- 2026年6月23日　京都大学「子供と死別した遺族支援の研究プロジェクト」開始の発表（京都大学）

本件連絡先

京都大学大学院医学研究科 予防医療学分野 特定助教 今村知彦

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町先端科学研究棟308号室

Tel: 075-753-4400

E-mail: imamura.tomohiko.5w@kyoto-u.ac.jp